

雨降る火山の国の温泉文学
—夏目漱石、田山花袋、
宮沢賢治、獅子文六

2025年6月6日 健康と温泉フォーラム

法政大学教授（表象文化論、場所論、近代文学研究）

岡村民夫

雨降る火山の国の温泉文化を研究する意義

「最初に諸君の御注意を乞ひたいことは、**日本が世界全体の学問に向つて、将来是非とも分担しなければならぬ仕事**が地理研究の方面には非常に多いといふことである。即ち若し我々が手を著けなかつたならば、それだけで全部で無い迄も大部分、人類の学問が進まぬ結果になる問題があるのである。（...）例へば**火山**のこと、**温泉と社会生活の関係**である。**地震**などもその一つであり、又**梅雨**と色々の交渉の如き、算へたらまだ幾らもあるであらうが、今日御話をして見ようと思ふ島々の研究ほど、社会学の学徒としての清新なる努力を、多分に要求して居るものは無いのである。」（柳田国男「島の話」1926年講演、『青年と学問』1928年所収）

稲作農耕以前に遡りうる民族性

「原始・古代の祖先たちにとって、山は神であった。山が清浄であるからではなく、山が神秘不可測な〈憤怒〉であったからである。**山は、まず火の神であることにおいて、神なのであった。**」

日本の神の非常住性は「水稻耕作地帯＝東南アジア的なものとして解かれることが多かった。たしかに農耕生活という契機も重要であろうが、もっと遡って、**この火の山列島の生活そのものが持たざるをえない風土性**の問題として、その基盤の形成を考えるべきではないだろうか。火山と人々・潮流と人々・台風と人々の問題として、まず考えてみるべき要素を含んでいるようだ。」（益田勝実「火山列島の思想」1965）

日本の火山信仰（山岳信仰）

- 火山が神の宿る山とみなされ、噴火や地震が神の怒りと解釈された。
Ex. 864年の富士山噴火後、朝廷は富士山北麓に複数の浅間神社を建てさせた。阿蘇神社による「火口鎮祭」。
- 中世以降、火山帯が曼陀羅を体現した霊場と意味づけられ、修験者の行場となった。
- 噴気地帯を「地獄」や「賽の河原」に、随伴する火山湖や高地湿原などを「浄土」に見立て、石地藏や閻魔像、阿弥陀像などを設置し、多くの庶民が参拝した。

地理学者・志賀重昂による日本火山国論

志賀重昂『日本風景論』1894 (明治27) .10

- 火山の少ない欧米、中国、朝鮮と比較して、日本の「水蒸気の多量なること」と火山景観を賛美する一方、火山景観の芸術表象の欠如を批判：「日本の歌人は単に「山」としての火山岩の山岳若くは活火山を吟詠し、若くは風懷してこれに寄託せしのみにて、その火山の塊偉変幻なる所、活火山の雄絶壮絶にして天地間の大観を極尽する所に到りては、**いまだこれを写さざるなり、（…）これ千古の遺憾。**」→万葉・古今・新古今の富士の和歌
- 阿蘇山の火口を「絶大」「全世界第一」と賛美。
- 「崇高」な山岳美を知るための近代登山を促す。

国木田独歩 『忘れえぬ人々』 1898

- 1894年1月、国木田独歩、阿蘇山に登る（『日本風景論』の主要部の論説はすでに『亜細亜』1893年1月に掲載されていた）。
- 『忘れえぬ人々』で独歩はこの登山に触れ、そのカルデラを「**世界最大の噴火口の旧跡**」と紹介し、噴気を描写する：「足もとでは凄まじい響きをして白煙朦々と立騰り真直ぐに空を衝き急に折れて高嶽を掠め天の一角に消えてしまう。壮といはんか美といはんか惨といはんか、僕は黙つたまま一言も出さないで暫く石像のやうに立つて居た」。

夏目漱石『二百十日』 1906（明治39）

：最初の火山温泉文学

- 1899 (明治32) 年8月末～9月初旬、漱石は熊本第五高等学校同僚の山川信次郎と戸下温泉・内牧温泉に宿泊後、阿蘇登山をするが、台風の接近により登頂を断念。

右：阿蘇町内牧温泉・山王閣（2017年閉業）の庭園から阿蘇山方面(by岡村)



- ・台風の風雨と噴気と火山灰が入り混じった混沌

「鼻の先から出る黒烟は鼠色の円柱の各部が絶間なく蠕動を起こしつつある如く、むくむくと捲き上がつて、半空から大気の裡に溶け込んで禄さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。」

(1) まさに「水蒸気の多量なること」と火山が、崇高かつ科学的に表現されている。

(2) 噴気が、華族・金権階級に対する怒りに重ねられている。圭さんは噴気を指して「僕の精神はあれだよ」と言う。禄さんが「革命か」と訊くと、「うん。文明の革命さ」と応える。

「二人の頭の上では二百十一日の阿蘇が轟々と百年の不平を限りなき碧空に吐き出して居る。」

（３）入浴場面が火山灰の雨を先取っている。

「圭さんは何も云はずに一生懸命にぐいぐい擦る。擦つては時々、手拭を温泉（ゆ）に漬けて、充分水を含ませる。含ませるたんびに、禄さんの顔へ、汗と膏（あぶら）と垢と温泉（ゆ）の交つたのが十五六滴つつ飛んで来る。／『こいつは降参だ。ちよつと失敬して、流しの方へ出るよ』と禄さんは湯槽を飛び出した。」

→『二百十日』の阿蘇には、西洋近代的なものと、噴火を神の怒りとみる前近代的・民俗的な火山観が複合している。これは、これ以降の火山温泉文学にも認められる重要な特徴といえる。

近代本格温泉文学の特徴

(1) 風景に対する地理学的・気象学的なまなざし。

(2) 入浴場面の具体性。体感に訴える描写。

「深さは立つて乳の辺りまでであるから、運動の為に、湯の中を泳ぐのは中々愉快だ。」（『坊っちゃん』1906）

(1) 「水」と「熱」のさまざまな交わりに関する感受性や創造力。

- 『草枕』（1906）における地震のエピソード

- 雨と温泉：「降る雨は、夜の目を掠めて、ひそかに春を潤ほす程のしめやかさであるが、軒のしづくは、漸やく繁く、ぽたり、ぽたりと耳に聞える。立て籠められた湯気は、床から天井を隈なく埋めて、隙間さへあれば、節穴の細きを厭わず漏れ出でんとする景色である。」（『草枕』）

田山花袋『山上の震死（山上の雷死）』

1918（大正7）

- 二人の学生がS岳頂上近くS温泉に着き、熱気を帯びた群衆に驚く。

「生仏」といわれる男が旧硫黄採取場の廃屋で説教をしているのを見物し、感動する。男は「人間の罪惡を負つて、代つて」もうすぐ自分は涅槃に入ると説く。「怒号して空に向つて迸つてゐる噴泉は、をりをりかれ等にある暗示を与へた。その坩涌（ふんよう）にも、矢張山の上のその僧の忿怒に似た形が感じられた。」「曾てこの山だつてあの僧のやうに凄じい怒号をやつたことがあるんだからね。」と一学生。

ある日の夕方、男の臨終が迫っていると人々が話している。にわかに雷雨となり、雷光に学生二人は思わず頭を伏せる。「再びかれ等が頭を上げた時には、生仏の姿はもう其処に立つてゐなかつた。」

栗駒山須川温泉

- 1918（大正7）年、花袋は岩手県一関市の巖美溪見物後、栗駒山（須川岳）八合目（標高1126m）の須川温泉へ行く。その途上にて、昨日、須川温泉である男が金縁眼鏡に雷が落ちて亡くなった、という噂を聞く。
- 須川高原には「地獄谷」「地獄釜」「賽の河原」「浄土平」「大日岩」、石地蔵などがあり、火山信仰の霊場だったことがわかる。そもそも成層火山の栗駒山（大日岳）が古くは修験道の行場だった。花袋はそうした点に言及していないが、須川高原の宗教的来歴を踏まえて『山上の震死』を書いたのだろう。
- 僧の怒号が、噴泉のさまや、過去の火山噴火に喩えられている点や、天候の悪化は、『二百十日』に類似している。

川端康成『伊豆の踊子』 1926(昭和元)

旧制高校生の「私」は、夏休みに伊豆半島を北から南へ縦断する徒歩旅行をする。湯ヶ島温泉の宿で踊りを見て惹かれていた踊子の一座に、天城トンネルを抜けた下り坂で合流し、下田まで一座と同行することになる。湯ヶ野温泉で二泊し、「私」は踊子と親しくなるが、下田で「私」は彼らと別れ、東京へ帰る船に乗る。

「道がつづら折になつて、いよいよ天城峠に近づいたと思ふ頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい速さで麓から私たちを追つて来た。」

「峠を超えてからは、空の色までが南国らしく感じられた。」

背後にある川端の伊豆観（『伊豆天城』 1929）

- 火山群と多雨：半島の三方をめぐる黒潮

「この黒潮に立ち昇る水蒸気が、半島を豊かに潤し、伊豆全体の火山岩をぼろぼろに砕いて肥えた土地とする。」

- 南北の障としての天城山

「伊豆に温泉を出してゐる火山脈のうち、天城火山が最も大きく、最も新しく、（...）それだけに伊豆の大き過ぎる鼻である。」

「天城峠を北から越すことは、一つの新鮮な印象である。峠のトンネルを一步南へ出れば、からりと空の色がちがつて、明るい南国が匂ふ。」

「天城が伊豆の真ん中に盛り上つてゐるからどちらから来る水蒸気もそれに突きあたるし、半島を渡る雨気は天城に挨拶して過ぎざるを得ないのだね。」

川端康成『雪国』 1940（昭和15）

『伊豆の踊子』と**対称的に類似**しており、『伊豆の踊子』を踏まえて執筆されたと思われる。

- 天城山隧道（1905年開通）／上越線清水トンネル（1931年開通）：障壁・分水嶺としての三国山脈
- トンネルを抜けると雨がやみ「南国」／「国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。」
- 峠越えの旅人の温泉：温泉場の踊子／温泉場の芸者

川端は『伊豆の踊子』に加えて『雪国』を描くことで、海流の水蒸気をはらんだモンスーンが南北を往来する本州中央部の温泉を、太平洋側と日本海側の両方から捉えるにいたったのだ。

地質学にもっとも通じた作家・宮沢賢治

- 1915~1918 盛岡高等農林学校農学科第二部（農芸化学）で
火山灰土壌研究の権威・関豊太郎を指導教授とする。
- 1916.7 盛岡付近地質調査。
- 1918~1920 盛岡高等農林学校研究生として、稗貫群地質土
性調査に参加。志戸平、鉛、台などの温泉をベー
スに花巻西部の山地をフィールドワーク。
- 1922 『稗貫郡地質及土性調査報告書』刊行。鉛・大沢一帯
の耐火石採掘、台の白色土（陶土）と珪化凝灰岩
（陶石）について。

宮沢賢治『台川』 1922(大正11頃)

- 花巻農学校の教諭として生徒の台川沿い地質巡検を引率。その模様を私小説風に書いた短編小説。

「うん、あるある。これが裂罅を温泉の通った証拠だ。玻璃蛋白石の脈だ。

〔ここをごらん下さい。岩のさけ目に白いものがつまつてゐるでせう。これは温泉から沈殿したのです。石英です。岩のさけ目を白いものが埋めてゐるでせう。いい標本です。〕」

宮沢賢治『国立公園候補地に関する意見』

1925(大正14)



「焼走り溶岩流」
wikipediaより

- 1925年5月に森佐一を伴って岩手山東麓の焼走り熔岩流（八幡平市）を訪ねた経験を素材とした詩。

「いったいここをどういふわけで、／国立公園候補地に／みんなが運動せんですか／いや可能性／それはもちろん充分ありますよ／もちろん山ぜんたいです／うしろの方の火口湖 温泉 もちろんですな／鞍掛山はむろんです／Ur-Iwateとも申すべく／大地獄よりもまだ前の／大きな火口のへりですからな」

- 1921~1927年にかけて内務省により国立公園候補地16ヶ所の調査が行われていた。
- 大地獄：東岩手山より古い西岩手山の爆裂噴火口「大地獄谷」
- 鞍掛山（896m）：岩手山南麓に位置し、岩手山より古い網張火山群に属する。

- 「大地獄」という語をきっかけに、焼走り溶岩流一帯に人工の「地獄」を造るブラック・ファンタジーが語られる。

「さうしてここは特に地獄にこしらえる／（...）／さうして世界中から集った／猾いやつらや悪どいやつの／頭をみんな剃ってやり／あちこち石で門を組む／死出の山路のほととぎす／三途の川のかちわたし／六道の辻／えんま庁からの胎内くぐり／はだしでぐるぐるひっぱりまわし／それで罪障消滅として／天国行きのにせ免状を売りつける」

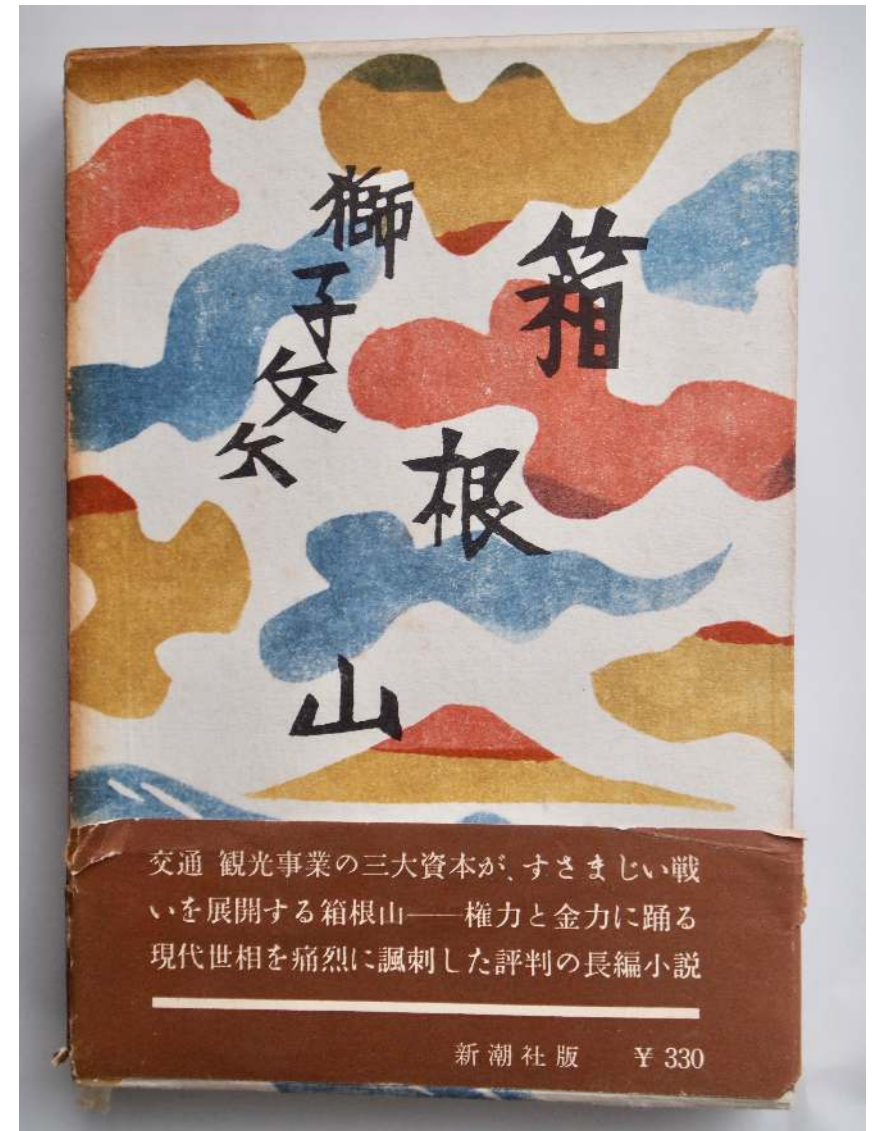
→岩鷲大権現（薬師、阿弥陀、観音）の信仰の山、大地獄谷の石地藏、鬼ヶ城。現代の悪徳者たちを火山の地獄で懲らしめるという想像力は、噴気地帯を「地獄」とする火山信仰を踏まえており、『二百十日』の影響も考えられる。

獅子文六『箱根山』

1961(昭和36)

足刈温泉（芦ノ湯）の玉屋（松坂屋）の若番頭乙夫と、若松屋（きのくに屋）の長女明日子の恋愛を、両老舗旅館のライバル関係や、氏田観光（藤田観光）の箱根進出を通してコミカルに物語る。温泉開発・観光事業を経営者サイドから描いた野心的な長編小説。

右：『箱根山』初版本（岡村所蔵）



- 氏田観光社長・北条一角（小川栄一）は小涌谷に大衆温泉殿堂と高級ホテルを築く：「水と地熱！／北条（小川栄一がモデル）は不思議な男で、その二つに、**原始的な信仰**を持っている。彼は、日本を救うものは水である、と考えてる。また、箱根ばかりでなく、彼のもくるむ観光事業は、必ず**富士火山脈**に沿っている。**地熱のあるところに、水を求める**。両方手に入れば、即座に事業に取りかかる――」

- 若松屋の女将・お里婆さんの対称的な温泉観

「小涌谷なんて、温泉場として、ワシの湯よりも、格が下ではないか。こっちは箱根七湯の昔から、天下に鳴り響いた古い湯治場であり、**箱根権現の霊湯**でもあった。**チャンと、地面の下から湧いて出て、いろいろの病気を治す力のある温泉**であって、蒸気で、谷川の水を熱したような新興温泉と、一緒にして貰いたくない――」

- ・獅子文六（岩田豊雄）自身による執筆動機説明

「観光資本や、旅館同士のケンカ話だけだったら、私は、この小説を書く気になったかどうか。私には、箱根の過去が、魅力的だった。（...）箱根修験道が発達してからの歴史に、心をひかれた。箱根が行楽の山として聞こえたのは、ごく近世であって、それまでは信仰の山だったから、箱根権現の勢力は大変なもので、自ら三千の僧兵を養ったばかりでなく、常に時の政権、武権と結んだ。従って日本歴史の重要事件が、この山上に響いてきた。箱根の山は天下の嶮だが、山上は決して未開地ではなかった。」（「『箱根山』を降りて」『朝日新聞』1961年10月12日）

→ 誤解によって疎遠になっていた乙夫と明日子は、湖水祭りの夜、箱根神社（箱根権現）の境内で偶然出会い、将来、結婚して互いの旅館を一つに統合することを誓いあう。

まとめ：雨降る火山の国の温泉文学

- 古来から日本人は信仰を通して火山を畏怖して敬い、火山に登攀し、その温泉に浸かってきた。
- 文学史のなかで火山や温泉が具体的に描かれるようになったのは、明治末以降である。それを可能にしたのは、写実的な描写技術の習得とともに、地質学的・気象学的まなざしの習得である。
- ただし、そうした近代の文学にも、直接的にはないが、間接的ないし暗示的に火山信仰や温泉の聖性がしばしば表現されている。
- 火山と温泉は日本近代文学の形成の深層に関わる。
- 日本列島の風土や歴史に養われた温泉の奥深さを見直したい。